

「高校世界史 A における近現代の内容構成」

—日本の近代化の構造-機能-変動理論的分析—

鵜木 毅

南北問題を近現代史の中心的課題としてとらえたとき、非西洋諸国の近代化・産業化の過程をどのように内容構成すればよいであろうか。近現代史を中心に構成される世界史 A の内容構成として中核となる課題である。非西洋発展途上国が近代化を始めるとき、それは自らの文化的伝統と異質な西洋の文化を社会に移植し新しい文化を創造するという行為となる。そのため多くの国々は近代化の過程で歪みや停滞を余儀なくされ、近代化の達成に苦闘している。その意味では、こうした非西洋発展途上国の近代化を分析的に見る視点が求められているといえる。本小論では富永健一氏の機能-構造-変動理論に基づく「近代化理論」を分析の枠組みとし、近代産業社会の形成に成功した日本の近代化を分析することで、富永氏の「近代化理論」の非西洋発展途上国の近代化に対する有効性を検証した。

I. はじめに

高校地理歴史科に世界史 A が導入された。この教科の特色は、2 単位という少ない授業時間数で、なおかつ世界の歴史の流れを近現代史を中心に、現代世界の基本的な構造とその変動について歴史的な観点から把握することにある。ここでは従来型の世界史 B とは異なった大胆な内容構成が求められているといえよう。では、現代世界の基本的な構造とその変動を知るためには、どのような観点で世界史を構成していけばよいであろうか。

現代世界の基本的な構造は、いわゆる南北問題として現代世界の構造をとらえることが適切であると考える。現在国際社会という体制があり、その中で豊かな「北」の国々と貧しい「南」の国々（近年 N I E s の台頭や南南問題などでさらに階層化が進んでいる）が併存しており、多くの国際問題はこうした経済格差から生じている。それゆえに、なぜ世界はグローバルに結び付けられたのか、またなぜそのような貧富の格差がついたのか、なぜ「南」の国々は近代化できずにいるのか、こうした問題の解明を通して現代世界を理解する必要があると思うのである。この問題に関してはウォーラステインの世界システム論が有名であり、多くの示唆に富んでいる。特に世界がグローバルに結び付けられた理由やその過程、及びそのことと同時にかつ必然的に進行した貧富の格差に関しては説得力がある。しかし多くの南の国々ではなぜ近代化がすすまないのか、その停滞する理由は何であるのか。その中で日本が近代化を達成できたのはなぜか、同じく N I E s の成功の理由は何であるか、近代化した日本にいわゆる「日本的商慣習」なるものが残存するのはなぜか、またこうした慣習は将来どうなるのか、などは十分な説明ができないという問題がある。この問題に答えるために、本発表では富永健一氏の構造-機能-変動理論に依拠し、近代化という社会変動と非西洋諸国の近代化が抱える課題を理論化するとともに、日本の近代化過程の分析を通して、世界史 A の内容構成の在り方を提示したい。

II. 近現代史の認識論的枠組み

1. 世界史における近代と近代化

近代社会とはどのような社会をいうのであろうか。また、ある社会が近代化するとはその社会がどのように変動することをいうのであろうか。一般的に近代的なるものの諸要素はいくつかあるが、高度に発達した産業やよく整備された組織によって社会が形成されている時に、その社会が近代化されているという。富永氏は社会の近代化を技術的経済的領域、政治的領域、社会的領域、文化的領域という4つの領域に分け、それぞれの中に含まれた諸要素を図1のように整理している。

歴史的には近代化へ向かう一連の社会変動は西洋において始められた。中世ヨーロッパ封建社会の内部から、人々はその不合理な伝統による束縛に不満を高め、その束縛から逃れるために、社会構造を変動させるべく一連の動きを始めた。

神学的・形而上学的な知識ではなく合理主義にもとづく科学的な知識を求めて、封建的な束縛からの自由を求めて、さらなる欲求充足を求めて、ルネサンスや宗教改革、大航海時代などの歴史的な現象を皮切りに、市民革命、産業革命など、文化的・社会的領域の変動に始まり、政治的領域や経済的領域に波及していく数世紀にもおよぶ大変動であった。西洋社会はこうした大変動を通して社会の各領域における近代的な諸要素を創造し、社会のシステムを再編し、社会を変動させていったのである。

《図1》 近代化の諸要素

| 領域 | 伝統形態 | 近代的形態 |
|----------|------|---|
| 技術的経済的領域 | 技術 | 人力・畜力 → 機械力 { 動力革命 情報革命 } (産業化) |
| | 経済 | { 第一次産業 → 第二次・第三次産業 自給自足経済 → 市場的交換経済 (資本主義化) |
| 政治的領域 | 法 | 伝統的法 → 近代的法 |
| | 政治 | { 封建制 → 近代国民国家 専制主義 → 民主主義 (市民革命) |
| 社会的領域 | 社会集団 | { 家父長制家族 → 核家族 機能的未分化 → 機能集団 (組織) |
| | 地域社会 | 村落共同体 → 近代都市 (都市化) |
| | 社会階層 | { 家族内教育 → 公教育 身分階層 → 自由・平等・社会移動 |
| 文化的領域 | 知識 | 神学的・形而上学的 → 実証的 (科学革命) |
| | 価値 | 非合理主義 → 合理主義 (宗教改革/啓蒙主義) |

(富永健一「近代化の理論」p.35)

こうした近代的なるものの諸要素は、世界が西欧主導により経済の世界システムに組み込まれる過程で西洋以外の地域にも広がっていった。帝国主義の下に圧倒的優位な軍事力を背景として、西洋諸国は自国商品の市場および原料などの一次産品の供給地という役割を諸国に押し付け、世界経済を西洋中心のシステムに組み変えていった。こうした西洋主導の世界秩序の編成という環境の変化に対して、多くの非西洋社会は近代化の必要性に迫られ、近代化を試みるようになった。この近代的諸要素の受容過程で、西洋に起源をもつ近代的なるものの諸要素は非西洋諸国にもその価値を認められ、普遍性を有したものとなっていった。まさにその合理性のゆえに、非西洋の人々も民主主義や自由・平等などの価値観、科学的な精神などの西洋の近代化の過程で生まれた近代的諸要素を受け入れ、その価値を認めるようになっていった。しかしだからといって単純に「近代化は西洋化である」とはならない。長い伝統を有する独自の文化を有しているがゆえに、非西洋社会にとって、近代化とは西洋文明をそっくりそのまま自国に移植するというにはならず、西洋からの文化伝播にともない、伝統ある自国文化をつくりかえる過程となる。たとえ非西洋諸国が近代化の過程で

西洋社会を一つのモデルにしたとしても、文化の違いから、まったく西洋社会と同じになるはずもなく、非西洋諸国の近代化の発展過程は西洋の発展過程とは異なるものとならざるを得ないのである。さらに近代化への内的な成熟のないままに近代化を迫られる非西洋社会は、近代化の過程で伝統文化との間に深刻な内部対立を発生させることになる。この対立は異質な文化要素を受容することによって生ずるものであるため、伝統主義の側からの拒否反応も大きく、文化要素の受容に成功しても、伝統主義との軋轢から移植された近代的諸要素に何らかの歪みを生ずることが多い。また伝統主義の反発が激しい場合には、近代化そのものが停滞したり、挫折をしたりすることもある。このように非西洋社会の近代化という場合、その様相は社会ごとに多様であり、それぞれに独自の課題を抱えている。

2. 構造-機能-変動理論と近代化

こうした多様性をもつ近代化という社会変動をどのようにとらえればよいであろうか。近代化という社会変動を理解するための枠組みが必要となる。この問いに答えるには、まず社会をどのようなものとして捉えるか、その社会が変動するということは社会の何がどのように変わることをいうのかを明らかにしなければならない。

構造-機能-変動理論では、人間が社会を構成する理由を、個人だけでは欲求を十分に充足させることができないから人間は社会を構成するのだとする。一定の環境の下で環境から課せられる課題に対し、その環境に適応し人々の欲求を充足させつつ、社会を維持するために、社会は成員にその果たすべき役割（機能）を分担させ、より効率的に欲求を充足させるためにその役割を組織化していく。人々はその人に与えられた地位や役割というものによって、相対的に恒常的な一定の構造をもって結び付けられ、社会が環境との関連で達成することを求めている欲求充足活動に従事することでその社会の成員として認められ、その社会に適応していくことになる。

このように、一つの社会システムは、ある環境におけるある一つの構造のもとで、人々が要求する一定の水準の欲求充足能力を有することで、社会を存続・維持していく。しかし、人々のその社会に対する欲求水準が高まるか、あるいは当該システムにとっての環境条件が変化したりして、社会の成員にとってこれまでのシステムの欲求充足能力が不十分と感じられる場合、人々はそれまでの社会システムの構造に不満をもつようになる。こうした個人が大量に蓄積されれば、人々はやがて社会システムの構造を変えるよう要求し、何らかの行動をおこすことになる。社会は新しい事態（環境）に適応するために変動を試みるのである。人々は欲求を充たすことができるような社会システムの新しい構造を求めて試行錯誤をし、その中から社会の均衡が達成できる新しい構造へと収斂することで、一回の社会変動は帰結するのである。

社会変動はその動因において、内生因による近代化と外生因による近代化に分けられる。社会変動が内生因によって起こるという場合、その社会の内部でなされた新しい発明・発見や創造によって、社会の成員の多くが現行システムの欲求水準に不満をもち、より高い欲求水準を求めるように国民的規模で自発的に動機づけられた場合をいう。近代化という社会変動の場合、西洋の近代化はまさにこの内生因による近代化であった。キリスト教に支えられた中世封建社会の束縛に対し、しだいに成長してきた市民階級が不満をもち、経済・政治・社会・文化という社会システムの諸領域

において、それぞれの起動因としての資本主義の精神・民主主義の精神・合理主義の精神・科学的
精神に基づき、新しい社会システム構造を創りだしたのであった。一方外生因で起こる社会変動は、
社会システムの外にある環境からの働きかけがあり、環境の変化を受け入れて自らの現行の社会シ
ステムを変えるよう内発的な動機づけがなされた場合をいう。非西洋社会の近代化という社会変動
は、当然のことながら外生因によるものとなる。非西洋諸国は近代化の諸要素を自主的には創造す
ることができなかつたのであり、その近代化は西洋主導で引き起こされた世界経済システムの編成
という新しい環境に適応するために、西洋の生み出した近代的要素を受け入れ、それを社会に定着
させるという文化伝播にほかならないからである。

3. 非西洋社会の近代化

富永氏は非西洋社会が近代化を達成し、この文化伝播を可能にするには次の3つの条件を解決す
ることが必要であるとする。3つとは(1)伝播可能性があるか、(2)動機づけが広範になされている
か、(3)国内のコンフリクトが適切に処理されるか、である。伝播可能性とは非西洋諸国が近代化を
始めるにあたり、西洋から近代文化(近代的価値)を受け入れ、これを消化する社会の内的成熟度
がどれだけ高いかということである。農業社会段階としての成熟が不十分な社会では、一挙に近代
化・産業化を進めようとしても、近代化を担う社会階層が育っているわけではなく、社会の混乱を
増すだけで成功し難い。次に動機づけとは、近代化という社会変動の必要性をその国民がどれだけ
熱心に受けとめたかということである。その熱意が大きいほどその国民は近代化への努力をするこ
とになる。最後にコンフリクトとは、近代化に伴うその国の伝統的文化との軋轢である。近代的文
化要素は西洋においてのみ生まれたものであるから、当然非西洋社会にとってはこうした西洋の近
代的文化要素は異質なものである。しかし近代化とは西洋文明の文化伝播であり、自国の内部に近
代的文化要素という異質な文化的要素を取り込むということである。しかも非西洋社会は内生的に
近代化できなかったわけであるから、その異質な文化的要素の移植(文化伝播)は、政府主導とい
う上からの強力指導による社会変革に頼らざるを得なくなる。その結果、非西洋諸国の近代化は自
国の伝統的文化との軋轢を必然的に引き起こすのである。

また、社会を経済-政治-社会・文化の3つの諸領域に分け、それぞれの領域は社会のサブシ
テムとして相互依存性と相互浸透性をもちながら社会を維持・安定させているととらえるならば、
次のようなことがわかる。一般的に近代化という文化伝播では三つのサブシステム間でその近代的
価値の伝播可能性、受容の動機づけの度合い、受容過程でのコンフリクトの強さに差異ができる。
経済システムにおける近代的諸要素の文化伝播が早く達成され易く、政治システムはそれより遅れ、
社会・文化システムにおける文化伝播が最も遅くなる。その結果として、相互に関連し合うサブシ
ステム間に近代化進展度のアンバランスが生じ、近代化の過程でなんらかの歪みを派生させること
になる。例えば、経済的近代化が始まっても、社会的・文化的近代化はほとんど進行していないわ
けであり、その遅れた社会的価値観や文化的価値観が経済的近代化にも影響を与え、前近代的要素
を含んだ資本主義(例えば戦前の財閥など)を形成してしまうようなことになる。このように伝統
文化との軋轢を克服することなしには、非西洋諸国の社会発展は挫折してしまうし、社会のサブシ
ステム間の文化伝播の達成度の違いにより非西洋社会の近代化は歪みを生じることになるのである。

富永氏は非西洋社会がこうした問題を克服し、近代化・産業化を達成する為の課題として、次の5つを提示する。(1)農業社会としての内的成熟度が充分であり、伝統主義からの離脱に対する強い動機づけが広範な人々の間に形成されているという近代化・産業化に向けての初期条件が整っていること。(2)近代化・産業化を推進し、政治の力によって産業文明を定着させる能力をもつ指導者および行政組織が存在すること。(3)伝統主義とのコンフリクトを適切に処理し、克服すること。(4)本来異質な近代的文化諸要素を内部化し、担っていく社会階層が出現すること。(5)国際関係における不利な状況から離脱すること。すなわち、資本主義の経済世界システムに組み込まれ、余剰収奪の対象とされることから離脱することである。これは国内にこうした外の勢力と呼応する勢力が形成されることで起こり得るとするならば、国内問題として解消される。

非西洋諸国の近代化を説明する場合に、その社会が以上の課題をどのように解決したかを分析することで、その国がなぜ近代化・産業化に挫折したり停滞したりするのか、また成功したとしても「日本的商習慣」などという西洋とは異質な制度をなぜ残しているのかを説明できるようになるのである。

Ⅲ. 高校世界史Aの近現代史の単元構成

世界史Aの近現代史の単元をどのように構成すればよいであろうか。富永氏はアメリカの社会学者パーソンズの理論を援用して、歴史的に見た場合、近代化の担い手の交代を四局面に分けている。第一局面はヨーロッパの北西コーナー（イギリス、フランス、オランダ）によって担われ、歴史事象としてはイギリスの産業革命とフランスの民主革命に代表される動きであった。第二局面はヨーロッパの北東コーナー（ドイツ、オーストリア）によって担われ、歴史事象としてはドイツの急速な産業化に伴う動きであった。第三局面はアメリカ合衆国によって担われ、歴史事象としては大戦後のアメリカ社会で達成された民主化と高度な産業化の動きであった。第四局面はアジア諸国（日本、NIEs諸国）によって担われ、歴史事象としては日本の近代産業社会形成やNIEs諸国の産業化（さらに加えるならば近年のASEAN諸国など）の近代化の動きである。これらの国々はそれまでの三局面が同じ西洋文化の伝統を共有する地域であるのに対して、西洋とは文化的伝統を異にする非西洋後発社会の近代化であるという特質をもつ。筆者はこれらの諸国は歴史的に中国の文化的な影響を受けており東アジア文化圏の国々とまとめることができると考える。そこで筆者は第四局面の国々に加えて、さらに世界史Aの前近代における世界認識の枠組みとなっていたイスラム文化圏と南アジア文化圏について、その代表的な国を取り上げることにしたい。こうすることで異文化理解という世界史Aの目標に適合すると考えるからである。

Ⅳ. 世界史A小単元「日本の近代化」の授業書試案

(1) 日本の近代化過程の分析方法

明治維新以後の日本の近代化過程を構造－機能－変動理論に基づいて分析するにあたり、非西洋発展途上国の近代化を分析するための分析手順を明らかにしておかねばならない。分析の手順としては、富永氏の手順をふまえ、次のような手順をとることとする。

①近代化という社会変動に向けての社会全体の変革要求の強さを分析する。

②経済-政治-社会・文化の近代化への動向を各社会領域ごとに、近代的価値観の伝播可能性の度合い、動機づけの度合い、文化伝播により引き起こされるコンフリクトの克服可能性の度合い、について分析する。

③近代化への社会変動の動きを、近代化への5つの課題ごとに評価していく。

(1)近代化・産業化への初期状態

…伝統社会の社会の成熟度

(2)政府の近代化・産業化政策

(3)近代化推進派と伝統主義派との内部コンフリクトの克服

…近代化に向けての国内問題

(4)西洋からの文化伝播として受け入れたものの内部化

(5)国際関係における不利な状況からの離脱

…近代化に向けての国際問題

(2)世界史A小单元「日本の近代化」の授業書試案

1. 小单元名；「日本の近代化」

2. 小单元の目標；日本の近代化について、構造-機能-変動理論に基づいて分析的に説明できる。

3. 小单元の構成

パートA…明治維新以降戦前までの日本の近代化

- ・明治維新以前、社会変動へ向けての変革要求はどのようなものであったか。
- ・明治維新以前の経済的近代化はどのようなものであったか。
- ・明治維新以前の政治的近代化はどのようなものであったか
- ・明治維新以前の社会的-文化的近代化はどのようなものであったか。
- ・明治維新以降戦前までの日本の近代化はどのようなものであったとどういうるか。

パートB…戦後の日本の近代化

- ・戦後の近代化へ向けての変革要求はどのようなものであったか。
- ・戦後の経済的近代化はどのようなものであったか。
- ・戦後の政治的近代化はどのようなものであったか
- ・戦後の社会的-文化的近代化はどのようなものであったか。
- ・戦後の日本の近代化はどのようなものであったとどういうるか。

4. 到達目標

(1)概念的知識

A. 戦前の日本の近代化は、政府の伝統主義的な体質により、上から支援された産業化だけが先行し、民主革命は不完全となり精神革命はほとんど進展しないという跛行性を有した。こうした不安定さが近代的セクターと伝統的セクター間の緊張を生み、社会に絶え間無いコンフリクトが引き起こされた。

ア. 勤勉な上層農民のある程度の資本蓄積と商業の発展をみながらも伝統的停滞社会であった幕藩体制は、その経済的破綻と国防上の危機意識により広範な社会変動への動機づけが形成されたが、明治維新という社会変動は尊王攘夷という伝統主義に基づいて実行された。

イ. 戦前の産業化は、産業技術が本来持つ伝播可能性の高さ、国民の国防上の危機意識に支え

られた産業化への高度の集会的動機づけの形成、政府の的確で強力な支援などにより達成された。

ウ．戦前の民主化は、その普遍的価値観から一定の支持を獲得し、成果をあげたが、その支持は都市部や知識人に限られ、一般大衆に定着するまではいかず、民主化運動も政府の伝統主義的体質（国体の護持）を変えるほどの強さをもてなかった。結果として政府と伝統的主義派により民主化の動きは抑圧された。

エ．戦前の自由・平等・合理主義を求める精神革命は文化伝播が最も困難で、受容への動機づけに欠き、政府の伝統主義的体質は旧制度の温存を強化する政策をとったため、社会的・文化的近代化はほとんど進まず、ナショナリズム台頭の中で逆に伝統主義派が強化された。

オ．江戸時代の農業は農業技術の改善や農村工業の発展などにより、近代化・産業化に必要な公共投資費用を負担することができるまで成長していた。また農村工業の発展は、都市工業に必要な労働力の訓練を準備しており、伝統社会における成熟度は十分であった。

カ．初期の明治政府に大久保利通に代表される近代化推進派が政権を握り、上からの的確に産業化をオーガナイズした。また初等教育の普及を背景に、この政策に応えることのできる新興企業家層や組織的に育成が図られた熟練工などが育った。また、都市を中心に知識人も形成され、民主化の運動を支えた。しかし政府の伝統主義的政策および不況による農産物価格の下落、地主制度の下での高率小作料、農業資本形成のための近代的金融の欠如などによる農村の窮乏が農村部における家父長制家族と村落共同体を温存させ、貧困に苦しむ農村は近代化とは無縁の存在として、近代化に対抗する伝統主義派の牙城となり、近代セクターと伝統セクターのコンフリクトをつくりだした。戦前の段階ではこの二重構造のコンフリクトを解決することができず常に厳しい緊張関係が続いた。

キ．初期の明治政府が負った対外的不平等条約に対して、自由民権運動に見られたように国内世論の多くは国際的な従属関係の解消を政府に強く迫った。この世論を背景に政府は条約改正に成功した。

B．敗戦による伝統主義的価値体系への懐疑がアメリカに具現された近代的価値体系への動機づけを強固にし、占領軍による上からの社会制度改革とあいまって制度的な近代化が整備された。その後生じた高度経済成長はこの制度の下で広く国民の大多数にその成果を分配することになり、幅広い国民の支持を受けながら、自由競争経済と戦後民主主義と平等化された大衆社会を実現した。

ア．敗戦の衝撃が伝統主義的価値体系に対する国民の信頼を喪失させ、逆に勝利したアメリカに具現された近代的価値体系への国民の動機づけを強固にした。また、占領軍により強力に進められた戦後民主改革は伝統主義派の退潮とあいまって、社会の諸領域にわたる制度上の近代化を可能にした。

イ．戦後経済は財閥解体、独占禁止法の成立といった戦後改革の上に、通産省を中心とした政府の産業優先政策も支えられ高度経済成長が始まり、自由競争経済が確立した。さらに貧しさからの脱却という個人ごとの強固な動機づけもあり、日本人は大衆的規模で初めて貧困か

ら脱却し、近代的な産業社会の形成に成功した。

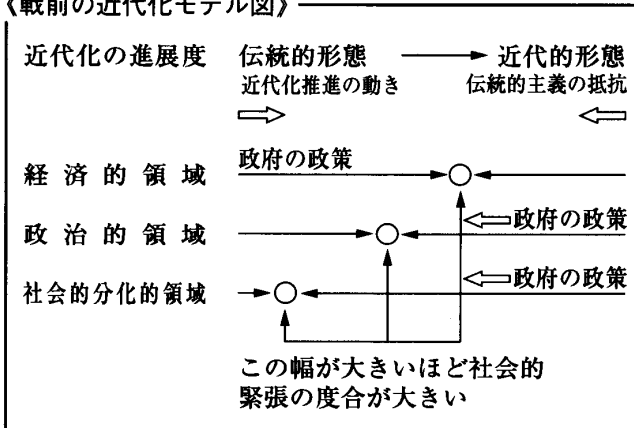
ウ。占領政策により民主主義の制度が整えられたが、国民の民主主義への動機づけは成熟しておらず、上から与えられた民主主義という側面をもっていた。そのため前近代的な要素が残された。

エ。急速な高度経済成長が社会構造の急速な近代化（産業構造の変動、職業構造の変動、被雇用者層の増加、都市化、核家族化、中間層意識の肥大、第3次産業従事者の増加）をもたらし、その結果実現した「平準化された大衆社会」が自由と平等という価値を具現している。

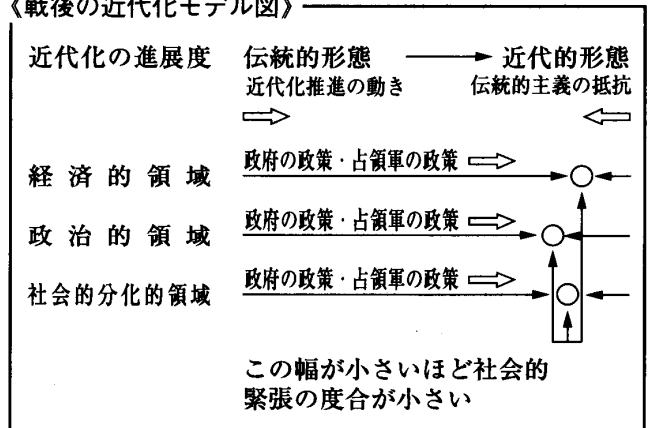
オ。初期には伝統主義派に代わって政治を担った戦前の民主化推進派と占領軍が近代的要素の実現をめざし強力な制度改革を進めた結果、農地改革とそれにつづく農業保護政策によって農村の貧困は改善され、近代セクターと伝統セクターの二重構造と両者の経済的格差という問題が解消した。独立後貧困からの脱却を求める国民と政府が一体となって進めた高度経済成長の結果として実現された自由競争経済と戦後民主主義と平準化された大衆社会は、戦前の各社会領域間の跛行性を無くし、緊張や対立の少ない社会を実現した。

(2) 日本の近代化の構造モデル

《戦前の近代化モデル図》



《戦後の近代化モデル図》



5. 小単元の展開

| 発問 | 教授・学習活動 | 資料 | 生徒に習得させたい知識 |
|--|--|----|--|
| <p>◎ある国の社会が近代化するとは社会の何がどのように変わることなのであろうか。</p> <p>・近代化された社会とはどのような社会か。</p> <p>・こうした近代的な要素は歴史的にはいつ、どこで形成されたものか。</p> <p>・西欧以外の近代化を成し遂げた国はあるか。</p> | <p>T. 発問する。 S. 答える。</p> <p>T. 発問する。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 答える。</p> | ① | <p>・産業が発達している社会。法律が整備され、人々の権利が保障されている社会。人々が自由で平等な社会。迷信や不合理な慣習がない社会。etc.</p> <p>・16世紀から18世紀にかけて西欧で徐々に形成されてきたものである。</p> <p>・アメリカ合衆国と日本が達成した。さらに、NIEs諸国が近代化を達成しつつあると見なされている。ただしアメリカは西欧と文化的な同質性をもっている。</p> |
| <p>◎今なお多くの非西洋発展途上国が近代化できずにいるが、なぜ非西洋諸国の近代化はあまりすすまないのでしょうか。</p> <p>・非西洋発展途上国の近代化を分析するためには近代化について何らかのモデルが必要であるがどの国が適切であらうか。</p> | <p>T. 投げかける。 S. 考える。</p> <p>T. 投げかける。 S. 考える。</p> | ② | <p>・非西洋発展途上国の社会の実情を分析しないとわからない。</p> <p>・資料に従い非西洋発展途上国の近代化を、西洋からの文化伝播による自国文化のつくりかえととらえるなら、非西洋諸国で近代化を達成した日本が妥当であらう。</p> |
| <p>◎近代化のモデルとすべき日本の近代化の特徴はどのようなものであろうか。富永健一氏の近代化理論を手掛かりに分析してみよう。</p> | <p>T. 富永氏の近代化理論の概要を説明する。</p> | ③ | <p>・非西洋諸国の近代化は文化伝播による社会変動であるため、文化の伝播可能性、動機づけの強さ、文化伝播に伴う国内のコンフリクトの強さがその成否を決定す</p> |

| 発問 | 教授・学習活動 | 資料 | 生徒に習得させたい知識 |
|--|--|-------------|--|
| | S. 富永理論の分析方法を習得する。 | | る。こうした文化伝播は社会の経済的、政治的、社会的・文化的領域において相互浸透しながら別々に進展し、各領域の進展度の違いが社会に不安定をもたらし、近代化を阻害する。だから各領域の文化伝播の状況を分析することで、その社会の近代化の状況と課題が明らかになる。 |
| ◎日本の近代化はどのようにして始まったか。 | T. 発問する。 S. 調べる。 | ④ | ・ 250年以上の長きにわたり続いてきた幕藩体制は、財政的に破綻しており、それに欧米列強の外圧による国防上の危機意識から国民に幅広く変革への強い動機づけが生まれた。しかし形成された国家は古代理国体観念と攘夷的排外主義に強く支配されていた。 |
| ◎明治政府の経済政策とはどのようなものか。 ・ この政策を実行したのはだれか。 ・ 大久保の経済的近代化への展望はどのようなものであったか。 ・ 大久保は経済的近代化をどのように進めたか。 ・ 明治政府の経済的近代化政策は成功したか。 ・ 経済的近代化の歪みはどうかであったか。 | T. 発問する。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 答える。 | ⑤ ⑥ ⑦ | ・ 殖産興業という政府主導の産業化政策であった。 ・ 大久保利通により推進された。 ・ 日本が列強の植民地になることを回避し、列強と対等の立場につくためには、政府の責任で産業化を推進して国民経済を豊かにすることが必要であるというのが大久保の経済政策の展望であった。 ・ 近代的技術および近代的経済的諸制度を、政府の力で国内に根付かせるために、外国人技師を招いて伝播可能性の高い産業技術を導入し、国内の経済的諸制度の整備を推進した。さらに、本来であれば個人の欲求充足が目的である経済活動を、国家の危機意識を背景に国家目標にすることで、伝統的に軽視されてきた経済活動を優先させ、国民の動機づけに成功した。 ・ 明治政府の官営工場の多くを払い下げられた政商は経営を効率化し、しだいに財閥を形成しつつ、同時期に輩出した企業家とともに日本の産業化を推進した。 ・ 財閥の前近代的形態である同族集団による経営に見られるように、近代的セクターも歪みが内在されていたし、なによりも近代化の過程でその負担を押し付けられた農村部では、農民は困窮化し、地主制度の下で苦しんでいた。結果、農村部は近代化の恩恵を受けることも無く負担のみを押し付けられ、近代化そのものに反発し、伝統主義およびファシズムの温床になった。 |
| ◎政治的近代化はどのように進められるだろうか。 ・ 明治時代の政治的近代化はどのように進められたか。 ・ 政府はどのように対処したか。 ・ 大正時代の政治的近代化はどのように進められたか。 ・ 政府はどのように対処したか。 ・ 政治的近代化はどの程度達成されたか。 | T. 投げかける。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 T. 発問する。 S. 調べる。 | ⑧ ⑨ | ・ 政治的近代化は民主主義の確立であり、本来は下からの変革の動きとなる。従って民主化運動とそれに対する政府の対応を分析すればよい。 ・ 西洋文明の伝播によりもたらされた民主主義の思想は知識人を中心に担われ、自由民権運動という形で政府に政治的近代化を要求したり、外国との不平等条約撤廃を要求したりした。 ・ 明治維新を推進したのは近代化の思想ではなく、国体思想であった。そのため明治政府は政治的近代化を求める自由民権運動を厳しく弾圧した。政府は自由民権運動の圧力に押されて憲法を制定し、国会を開設したが、それははなはだ不完全な民主化であった。 ・ 政党政治の発展と普通選挙を求める大正デモクラシー運動が展開された。 ・ 政府は護憲運動に押されて男子普通選挙制を認める一方で、治安維持法を成立させ民主化運動を弾圧した。 ・ 明治～大正を通じて行われた民主化運動で不完全ながら政治制度は整えられた。しかし、政府の強固な伝統主義を変えるまでにはいたらず、国民大衆に浸透するまでは至らず、軍部の台頭とともに、全体主義と侵略戦争を抑制することができなかった。 |
| ◎社会的・文化的近代化はどのように進められるだろうか。 ・ 政府は社会的・文化的近代化にどのように対応したか。 ・ 社会的・文化的近代化はどの程度達成されたか。 | T. 投げかける。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 答える。 T. 発問する。 S. 答える。 | ⑩ ⑪ | 社会的・文化的近代化とは機能分化が進み、他者の拘束からの自由、個人の平等化、合理主義化が進展することである。この領域の変革は日常生活と密接に結びついているだけに大変困難である。実際に国民に精神革命の動機づけが形成される可能性は戦前には皆無であった。 ・ 教育勅語にみられるように儒教的な道徳観念を重視し、社会的・文化的近代化を抑圧し、伝統主義を一層強化する政策をとった。 ・ 国民が変革に向けて動機づけられることもなく、政府は伝統主義を強化する政策を実施する中で、戦前には社会的・文化的近代化はほとんど達成されなかった。 |
| ◎社会の各領域についての以上の分析を基にして近代化への5課題をそれぞれ検討してみよう。 ・ 第一命題の初期状態はどう評価できるか。 | T. 投げかける。 S. 検討する。 T. 発問する。 S. 評価する。 | ⑫ | ・ 日本の農業は農業技術の改善などにより、近代化・産業化に必要な公共投資費用を負担することができるま |

| 発問 | 教授・学習活動 | 資料 | 生徒に習得させたい知識 |
|---|--|-------------------------------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・第二命題の中央政府の指導者の資質はどう評価できるか。 ・第三命題の国内のコンフリクトの解決はどのようになったのであろうか。 ・第四命題の近代化を担う国内の階層は登場しえたのであろうか。 ・第五命題の国際関係における不利な状況からの離脱はどう解決したであろうか。 | <p>T.発問する。 S.評価する。</p> <p>T.発問する。 S.評価する。</p> <p>T.発問する。 S.評価する。</p> <p>T.発問する。 S.評価する。</p> | ⑬ | <p>で成長していた。さらに農村工業の発展は、都市工業に必要な労働力の訓練を準備した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済的近代化については大久保利通のような指導者が登場し、的確に政府の役割を認識し遂行した。大久保の死後は伊藤博文や松方正義に受け継がれた。 ・政府の伝統主義的政策および不況による農産物価格の下落、地主制度の下での高率小作料、農業資本形成のための近代的金融の欠如などによる農村の窮乏が農村部における家父長制家族と村落共同体を温存させ、貧困に苦しむ農村は近代化とは無縁の存在として、近代化に対抗する伝統主義派の牙城となり、近代セクターと伝統セクターのコンフリクトをつくりだした。戦前の段階ではこの二重構造のコンフリクトを解決することができなかった。 ・支配者階級であった武士のみならず初等教育の普及を背景に、上層農民階級、商人などから政府の政策に応えることのできる新興企業家層が育ち、また組織的に熟練工などの育成が図られた。さらに同じ階層から都市を中心に知識人も形成され、民主化の運動を支えた。 ・初期の明治政府が負った対外的不平等条約に対して、自由民権運動に見られたように国内世論の多くは国際的な従属関係の解消を政府に強く迫った。この世論を背景に政府は条約改正に成功した。 |
| <p>◎戦前の日本の近代化はどのように要約できるであろうか。</p> | <p>T.発問する。 S.考える。 T.まとめる</p> | | <ul style="list-style-type: none"> ・戦前の日本の近代化は、上からの主導により産業化だけが先行し、民主革命の遅れと精神革命のより一層の遅れという跛行性を有しており、こうした不安定さを専制的な権力で抑圧しようとする政府の政策が社会に絶え間無いコンフリクトを生み出し、結果としてファシズムを醸成することになった。 |
| <p>◎戦前に近代化を達成できなかった日本が、なぜ戦後に急速な近代化を達成できたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦後の日本は戦前の強固な伝統主義をどのように払拭したのであろうか。 ・戦後の経済的近代化はどのように進められたか。 ・戦後の政治的近代化はどのように進められたか。 ・戦後の社会的・文化的近代化はどのように進められたか。 ・戦後の日本の近代化はどのように評価されるか。 | <p>T.投げかける。</p> <p>T.発問する。 S.答える。</p> <p>T.発問する。 S.調べる。</p> <p>T.発問する。 S.調べる。</p> <p>T.発問する。 S.調べる。</p> <p>T.発問する。 S.評価する。</p> | <p>⑭</p> <p>⑮</p> <p>⑯</p> <p>⑰</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・敗戦の衝撃が伝統主義的価値体系に対する国民の信頼を喪失させ、逆に勝利したアメリカに具現された近代的価値体系への国民の動機づけを強固にした。また、占領軍により進められた戦後民主改革により、社会の諸領域にわたる制度上の近代化が達成された。 ・戦後経済は財閥解体、独占禁止法の成立といった占領軍による戦後改革の上に、貧しさからの脱却という個人的な動機づけに基づき、さらに通産省を中心とした政府の産業優先政策にも支えられ高度経済成長が始まり、自由競争経済が確立した。日本人は大衆の規模で初めて貧困から脱却した。 ・占領政策により憲法を始めとする民主主義の制度が整えられたが、国民の民主主義への動機づけは成熟しておらず上から与えられた民主主義という側面をもっていた。そのため前近代的な要素が多分に残された。 ・急速な高度経済成長が社会構造の近代化（産業構造の変動、職業構造の変動、被雇用者層の増加、都市化、核家族化、中間層意識の肥大、第3次産業従事者の増加）をもたらし、その結果実現した「平準化された大衆社会」が自由と平等という価値を具現している。 ・敗戦による伝統主義的価値体系への懐疑がアメリカに具現された近代的価値体系への動機づけを強固にし、占領軍による上からの社会制度改革とあいまって制度的な近代化がされた。農地改革とそれにつづく農業保護政策によって農村の貧困は改善され、近代セクターと伝統セクターの二重構造と両者の経済的格差という問題が解消した。さらに政府も一体となって進められた高度経済成長の結果として実現された自由競争経済と戦後民主主義と平準化された大衆社会では、戦前の社会に残されていた家ゲメインシャフトと封鎖的村落ゲメインシャフトは完全に崩壊し、戦前の各社会領域の跛行性は無くなり、緊張や対立の少ない社会を実現した。 |

6. 教授資料番号および教授資料

- ①「近代化の諸領域」～富永健一『近代化の理論』p.35より
- ②「西洋の近代化と非西洋諸国の近代化」～富永健一『日本の近代化と社会変動』p.39より
- ③「近代化の分析モデル」～同上書 pp.58～68より筆者作成
- ④「伝統社会の成熟度」～富永健一『日本の近代化と社会変動』p.39より
- ⑤「大久保利通の『殖産興業に関する建議』より」～同上書 p.158より
- ⑥「殖産興業政策－近代産業の育成－」～『総合日本史図表』p.147より
- ⑦「近代産業の成立」～同上書 p.156より
- ⑧「自由民権運動の変遷」～同上書 p.152より
- ⑨「護憲運動の展開」～同上書 p.172
- ⑩「社会的－文化的価値の伝播の困難」～富永健一『日本の近代化と社会変動』p.201より
- ⑪「教育勅語」～日本史資料（上）p.533より
- ⑫「明治期に企業家として成功した人々の社会的出身背景」～富永健一 前掲書 p.323より
- ⑬「条約改正」～『総合日本史図表』p.155より
- ⑭「戦後改革の意味」～富永健一『日本の近代化と社会変動』pp.222～223より
- ⑮「戦後の諸改革」～『総合日本史図表』p.194より
- ⑯「耐久消費財の普及」～『総合日本史図表』p.201より
- ⑰「戦後世相史」～『総合日本史図表』p.208より

V. おわりに

非西洋の国の近代化を分析する視点として、富永氏の近代化論を用いて、非西洋諸国としては初めて近代化に成功した日本の近代化を対象として分析を試みた。富永氏の分析方法で日本の近代化を分析した結果として、なぜ戦前の日本が社会的に不安定でテロや騒乱が続いたのか、なぜ日本は軍部が政治を牛耳り対外侵略戦争に向かったのか、なぜ戦後の日本は近代的な産業社会を達成できたのかなどが理論的に説明できるものであった。富永氏の理論は他の非西洋諸国の近代化の分析にも有効に働くと評価できると考えられる。

《引用・参考文献》

- ①富永健一 『日本の近代化と社会変動－チュービンゲン講義－』 講談社学術文庫（1990）
- ②富永健一 『近代化の理論』 講談社学術文庫（1996）
- ③富永健一 『社会学原理』 岩波書店（1986）
- ④富永健一 『現代の社会科学』 講談社（1984）
- ⑤ウォーラステイン 『史的システムとしての資本主義』（川北稔訳） 岩波書店（1985）
- ⑥ウォーラステイン 『近代世界システム』I・II（川北稔訳） 岩波書店（1980）
- ⑦森 才三 「近代化理論の教材化」（『社会認識教育学研究』第8号 1993）
- ⑧『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（1988）
- ⑨『総合日本史図表』 第一学習社（1996）
- ⑩『日本史資料』上・下 東京法令出版（1973）